文春新書

804

日本人の誇り

藤原正彦

文藝春秋

藤原正彦（ふじわら まさひこ）

お茶の水女子大学名誉教授。1943（昭和18）年、旧満州新京生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻（共に作家）の次男。東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。78年、『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、2009年『名著講義』で文藝春秋読者賞受賞。主著に『国家の品格』『決定版　この国のけじめ』『天才の栄光と挫折』などがある。

文春新書

804

日本人の誇り（にほんじんのほこり）

2011年（平成23年）4月20日　第1刷発行
2011年（平成23年）5月15日　第4刷発行

著　者　藤原正彦
発行者　飯窪成幸
発行所　株式会社 文藝春秋

〒102-8008　東京都千代田区紀尾井町3-23
電話（03）3265-1211（代表）

印刷所　理想社
付物印刷　大日本印刷
製本所　大口製本

定価はカバーに表示してあります。
万一、落丁・乱丁の場合は小社製作部宛お送り下さい。
送料小社負担でお取替え致します。

©Fujiwara Masahiko 2011　Printed in Japan
ISBN978-4-16-660804-1

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。
また、私的使用以外のいかなる電子的複製行為も一切認められておりません。

日本人の誇り

藤原正彦

常州大学图书馆
藏书章

文春新書

804

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

はじめに

歴史を書くというのは憂鬱な仕事です。奈良とか平安ならそんなこともないのでしょうが、近現代史、特にそれを俯瞰するようなものを書くとなると大変です。著者の近現代史観がもろに出てしまうからです。近現代史観というのは、現代の政治、経済、社会など我々の周りで起きているほとんどの現象をどう見るかに深く関わっています。すなわち、近現代史をどう見るかを露わにするということは、自らの見識を露わにすることなのです。これは誰でも避けたい仕事です。とりわけ私のように軽薄なのに羞恥心だけは強い人間は是が非でも避けないといけません。

そのうえ近現代史の見方は、日本では大きく右と左のほぼ正反対の見方に割れていて、一方が他方を罵倒するという関係になっています。すなわちどちらの線で行っても半数から批判されることになります。左右は感情的対立にまでなっているので、中間的なことを書いても両派から嫌味以上のことを言われます。自らの見識を露わにしたうえ半数の人々から叱られるのですから、余程の勇気ある人か余程のおっちょこちょいにしかそんな仕事

はできません。無論、私は後者です。一介のおっちょこちょいで無鉄砲な数学者が、右でも左でも中道でもない、自分自身の見方を、溢れる恥を忍んで書き下ろしました。戦後六十六年にもなるのに、いつまでも右と左が五分に組んで不毛な歴史論争を続けているという状態は、日本人が歴史を失っている状態とも言え、不幸なことと思ったからです。

歴史を失った民が自国への誇りと自信を抱くことはありえません。この誇りと自信こそが、現代日本の直面する諸困難を解決する唯一の鍵なのです。そして今、未曽有の大震災に打ちのめされた人々の心を支え、力強い復興への力を与えると信ずるのです。

偉そうなことを言う私も、本書により、これまで隠しに隠してきた見識の低さが白日の下にさらされるのではないかと恐れています。しかし私には、強く、賢く、やさしい古女房がいます。彼女は私が本書を執筆中、落ち込みそうになるたびに、「大丈夫、あなたの見識や人格が高いとは誰一人思っていませんから」と力強く励ましてくれました。

春淡き朝、試練に立つ国を想いつつ

平成二十三年三月　　藤原正彦

日本人の誇り ◎ 目次

はじめに　3

第一章　政治もモラルもなぜ崩壊したか　9

低下する政治家の質、腰の定まらぬ外交、頻発する無軌道な殺人事件、勉強しない子供達……もはや対症療法では効果はない。

第二章　すばらしき日本文明　33

世界七大文明の一角を占める日本文明。江戸期に来日した外国人たちは「貧しくも幸福な社会」を目の当たりにして感銘した。

第三章　祖国への誇り　57

家族愛、郷土愛、祖国愛。人間の基本をなすこの三つの愛は、なぜ戦後日本からは失われたのか？　その策略の中心とは何か？

第四章　対中戦争の真実　103

「南京大虐殺」が突如、再登場したのは事件から八年半たった終戦後のことだった。証拠を捏造してまで演出した黒幕とは？

第五章　「昭和史」ではわからない　131
満州事変に対するリットン調査団が出した結論はきわめて妥当。帝国主義時代における「侵略」をめぐる国際常識を解き明かす。

第六章　日米戦争の語られざる本質　177
列強の中核をなす白色人種にとっての悪夢は、日中の連携だった。両国間に楔を打ちこむべくアメリカは周到に罠を仕掛けた……

第七章　大敗北と大殊勲と　209
黒船来航から敗戦後の占領までの百年戦争は、植民地主義や人種差別に対して、日本が独立自尊の精神を貫いてきた歴史の証だ。

第八章　日本をとり戻すために　235
帝国主義や新自由主義などは国民性に馴染まない。未曽有の危機を乗りきるヒントは、震災後の日本人の尊き姿に示されている。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

第一章　政治もモラルもなぜ崩壊したか

危機に立つ日本

日本はいま危機に立たされています。リーマンショックや大地震とは関係なく、十数年前から何もかもがうまくいかなくなっています。すべての人々がそれに気付いているのにどうしてよいか分らず暗い気持のまま日常を送っている、というのが現状です。私も月に一度か二度は、誰かに「日本は一体これからどうなるんでしょうか」と憂鬱な表情で尋ねられます。

日露戦争や日米戦争の前ならこんな会話も日本の随所で聞かれたはずですが、今の日本は一応の平和と繁栄の中にいるのです。それなのにどうして大多数の日本人が、日本は全面的ジリ貧の真只中にいると感じているのでしょうか。

経済に目を向けると、バブル崩壊後二十年近くにもなり、その間ありとあらゆる改革を重ねてきましたがどれもうまくいきませんでした。アメリカの忠告に従って進めたグローバル化や構造改革は、世界でも稀に見るほど安定していた社会を荒廃させ日本が大事にしてきた国柄を破壊しただけで、デフレ不況は一向になおりません。万能の杖のごとく喧伝

された「規制改革」「小さな政府」「官から民へ」なども今では空しく響きます。

現在の我が国の不景気は二〇〇八年のリーマンショックやそれ以降の円高とは無関係です。二〇〇〇年からリーマンショックまでの八年間、主要国が軒並みＧＤＰにおいて毎年数％の成長をとげている中、日本だけがデフレ不況をかこっていたのです。そのデフレ不況が現在も続いているだけで、日本の不況は主要国のものとは別の理由によるもの、すなわち日本固有の問題が何かあるということになります。円高やリーマンショックの後遺症と誤解してはいけないのです。

その結果、累積した財政赤字は世界一となり、なお増え続けています。一人当りＧＤＰも低下するばかりです。各国から羨ましがられた低い失業率は増え続け五％を超し、自殺者数はここ十三年連続三万人を超え、ついに先進国中で最も自殺の多い国となりました。四十歳以上の男性が全自殺の半数以上を占めています。

対中外交はなぜ弱腰か

政治に目を向けても相変らずのていたらくです。国内的には政治とカネの問題が未だに後進国並みにはびこっているし、外交では腰が抜けたままです。

とりわけ中国にはやられ放題です。尖閣諸島など、歴史的にも国際法的にも日本領であることは明白なのに、領海侵犯したばかりか海上保安庁の巡視艇に体当りまでしてきた中国漁船の船長を、中国の恫喝に屈し釈放してしまいました。体当りしてきた段階で中国漁船を撃沈してもよかったほどのものですが、日本政府首脳は目を泳がせたまま「私はビデオを見ていません」「釈放は検察の判断でされました」などと平気で言い、中国に断固たる抗議もせず「領土問題は存在しません」と蚊の泣くような声で繰り返すばかりです。

すばらしい学習をした中国はこれからも東シナ海でやりたい放題の乱暴狼藉を働き、こちらが逮捕などの行動に出るや謝罪と賠償を世界中に聞こえるようにがなり立て、それでもダメならありとあらゆる報復措置をとることでしょう。台湾の李登輝さんが言うように、中国とは「美人を見たら自分の妻だと主張する国」なのです（「文藝春秋」二〇一一年二月号）。私だって抑えているこのような言葉を平気で言う国なのです。

政府は、中国が尖閣を占領するなどの挙に出れば、米軍が助けてくれるとでも思っているのかも知れません。クリントン国務長官が「尖閣は日米安保の対象」と言ってくれた、とはしゃいでいるようですが、「だから断固守る」とは言っていません。この点をよく注意する必要があります。

日米安保条約は、日本の領土がどこかの国に攻撃されたら直ちに米軍が助けに馳せ参ずるとはなっていないのです。最も大切な第五条は、日本領内でどちらかが攻撃を受けた場合、それぞれは「自国の憲法上の規定及び手続に従って共通の危険に対処するように行動する」とあります。すなわち尖閣が中国による攻撃を受けた場合、米軍が助けに出るためには合衆国憲法にのっとり、まず大統領が軍事力の行使を決意し、ついで連邦議会がそれを承諾しなければなりません。アメリカ議会は世論に従って動きますから、問題は米国世論が尖閣防衛を支持するかどうかということになります。はるか彼方にある日本領の小島のために、アメリカ大陸を射程内に入れた核ミサイルを有する中国と一戦を交えるなどということを米世論が支持するとは、少くとも私には到底考えられないのです。

米軍が助けに出て来るとしたら、日本軍が一カ月ほど必死に戦っても支え切れず、石垣島や宮古島など南西諸島全体までが危うくなった、などという場合だけではないでしょうか。尖閣でいざこざの起きた時はアメリカも肝を冷やし、中国に自重を強く求めたはずです。中国が尖閣占領のような軍事行動に出た場合、米軍が助けに来ないのを日本が知ってしまう可能性があったからです。日米同盟ががたがたになるのを恐れたはずだからです。

集団的自衛権の問題もあります。日米の駆逐艦が並んで走っていて、第三国から日本艦

が攻撃されれば自動的にアメリカ艦は助ける義務があるのに、アメリカ艦が攻撃されても日本艦は自分が攻撃されない限り、憲法の拘束により助けに出られないからです。

このような片務的な状態を五十年以上もそのままにして悪びれもしない日本政府の狡猾に米世論が気付いたら、尖閣出兵に反対するどころの騒ぎでは治まらないかも知れません。

すなわち安保条約とは欺瞞の条約なのです。日露戦争の時の日英同盟（少くとも第二次と第三次）では、「日英の一方が、挑発の結果でなく、第三国から攻撃を受けた場合は、それがどこであろうと他方は直ちに来て協同戦闘に当る」と明言しています。攻守同盟です。安保条約のごとき「自国の憲法の規定と手続きに従って」などというまやかしはなかったのです。日米双方にとってまやかしなのです。これには両国に責任があります。日本側には「戦力を持たない」という憲法を持ったまま軍事同盟を結ぼうという狡猾、アメリカ側にはまやかしでも何でも米軍基地さえ日本に展開できればいいという狡猾です。

日本は今、自国を自分の力で守ろうともせず、安保条約のまやかしにも気付かぬまま、気付いてもそれを正そうともせず、守られているという幻想の中で安眠しています。周囲のあらゆる国に対し腰を屈（かが）め、揉み手をし、媚笑を浮かべ、風波を起こさぬことだけを心懸けて振舞っています。

アメリカの内政干渉を拒めない

とりわけアメリカに対してはまやかしの安全保障と引換えに屈従を誓っているかのようです。いつ暴落するか分らない米国債を買わされ続け、すでに世界一、二を争う所有額となりながら売ることさえままならない。なぜかこれについては政府もマスコミも触れようともしない。

「年次改革要望書」などという露骨な内政干渉まで拒めない。郵貯簡保の三百四十兆円をアメリカへ差し出し、アメリカの保険会社の日本進出を援護するために行なわれたような郵政民営化、世界で最も安定していた日本の雇用を壊した労働者派遣法改正、WHOに世界一と認められていた医療システムを崩壊させた医療改革、外資の日本企業買収を容易にするための三角合併解禁など、みな「年次改革要望書」で要求されたものでした。

かつての日英同盟は日本軍が頼りになったから結ばれました。日英同盟のごとく対等かつ堅固な日米同盟があって初めて、中国の脅しにびくともせず、北朝鮮の拉致日本人を他国に頼らず奪還できる国家ができ上がるのです。アメリカの属国でなく対等なパートナーとなるのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton